天然秋田杉の息吹を器に生かす

大館曲げわっぱの過去・現在・未来

リポーター　佐藤　功さん
（有浦４丁目）

さまざまな匠の技が文明の発達とともに失われつつある今、その技を誠実に守り、発展させようとしている人たちがいると聞き、小春日のある日、私は大館駅前の「大館曲ワッパ協同組合」を訪れ、理事長の伊藤国弘さんから「大館曲げわっぱ」の今昔などについて取材しました。

曲物（曲げわっぱ）の歴史

曲げわっぱは、一般に曲物（ヒノキ・杉などの薄い材を円形に曲げ、底を取り付け、合わせ目を樺・桜の皮などでつづった容器）といわれます。大館地方では弁当箱などの容器を、アイヌ語が語源ではないかといわれている「ワッパ」と呼んでいました。このことから、この地方の曲物を曲げわっぱと呼ぶようになりました。

曲物の歴史は非常に古く、古墳時代には神前に供物を捧げる道具として、木の葉、土器、平面の石とともに、木製の器（曲物のお盆）が使われていたといわれています。その後、生活の道具として使用されたものと思われます。

また、その使用（生産）範囲は、南は九州から北は北海道まで日本全国にわたります。その土地にある加工のしやすい木を使用して作られています。例えば、秋田では杉、青森ではヒバ、長野ではヒノキ、また地方によってはホオノキが使用されています。

曲物を作る技法・技術はその地方により多少違いはありますが、海外より伝導されたものではなく、日本の風土が育んだ木と日本人の生活の知恵から生まれた技法・技術といってもよいと思います。

大館曲げわっぱ

【その過去】

一六〇二年（慶長七年）佐竹氏が秋田へ移封後、大館城代の佐竹西家は、領内の豊富な森林資源を利用し領民の窮乏を救済するため下級武士たちに命じ、副業として曲げわっぱの製作を奨励したといわれています。

大館の常盤木町あたりは昔「お足軽町」と呼ばれ、そこに住んでいた足軽（下級武士）たちは、こぞって曲物の製作に力を入れ、旧藩時代は百人余りの曲物細工の職人がいたそうです。当時の曲物は、主として生活必需品が多く、ひしゃく、ちょうちんのワッカ、粉おろし、わっぱ弁当などでした。販路は青森や岩手、また米代川の船運を利用し山形や新潟、さらに関東地方へと広がっていったといわれています。その後、近代に入り流通経路なども整備され、豊富な資源と販路の拡大により、他の木材産業とともに全国的な規模として発展していきました。

約250年前の曲げわっぱ
（川口・小林重治さん所有）

【その現在】

伝統と技術を誇る大館曲げわっぱは、秋田を代表する地場産業の一つです。その材料である天然秋田杉は、軽くて弾力性に富み、きめ細やかな木目（年輪）と、淡紅色でも淡黄色でもない天然秋田杉

伊藤理事長（左）に取材する佐藤リポーター